
悩めるオオカミ少女の憂鬱

練馬治

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悩めるオオカミ少女の憂鬱

【Nコード】

N2140N

【作者名】

練馬治

【あらすじ】

高校生の加奈は、母親の再婚をきっかけに年上の義理の兄、壮介と出会う。最初は『家族』として接していこうと決めていたが、次第に加奈の中で彼に対して『家族』としてではない特別な感情を抱くようになる。それはいけないことだと思っていた矢先、彼女はあんな不思議な本と出会う。その直後、毎晩加奈の身に『オオカミの耳と尻尾』が生えてくるというおかしな現象が発生してしまい――。

【01】オオカミ少女への変身

夜の十時までが、加奈が普通の姿でいられる時間だった。

「兄さん。お風呂出たから、入ってもいいよ」

「ああ、分かった。ありがとう」

ドア越しから壮介の返事を聞いて、風呂上がりの加奈は自分の部屋に戻り、ドアのカギを閉めた。

濡れた髪をドライヤーで乾かしている間も、ちゃんとドアのカギを締めたか、ちゃんと窓にカーテンが掛かっているか、念のため目を配って確認する。

——問題ない。あとは、明日の朝までひっそりとしてればいいだけ。

そう思いながら加奈はドライヤーを乾かし終え、自分の机に向かう。

机の上には一冊の本が置いてあった。

見た目は、ごく普通のハードカバー本だった。

厚さはやや薄めで、表紙はタイトルが書かれておらず、背表紙を含めて質素な紅茶色のデザインしか施されていない。四ヶ月前、加奈が初めてその本を開いたときは、全くの無地のページが続いていた。

しかし、今はこの本自体が不定期ながらも『自動的』に物語を進めている。そして加奈の身に奇妙な現象が起こり始めたのも、この本を手にした時からだった。

「……そろそろかな」

独り言をつぶやいてから、加奈は時間が十時に迫っていることを確認。

着ていたＴシャツとズボンを脱いで、いつもの格好になる。

上は紫色のスポーツブラに、下はパンツ一枚。自分の部屋だといえ、最初の頃はこんな姿で夜を過ごすのも抵抗があったが、今はだいぶ慣れた。

しばらくして、いつも通りの『感触』が待ちかまえたかのようにやってきた。

直後、加奈は下着を少しだけ下に降ろす。

その部分に目を向けると、ニョキっとお尻と腰の間に『オオカミの尻尾』が生えていた。

加奈の髪色と同じ、茶色のかかった四十センチくらいの尻尾である。

それと同様に、頭のとっぺんにも『オオカミの耳』が生えていた。ちよんちよんと触ってみると、指の感触が微かに伝わってくる。目立っている所はそこだけだが、他にも細かい変化はいくつかある。両手の爪が変身前よりやや鋭くなっているし、八重歯も舌で確かめると少し尖っていた。

しかし、おとぎ話などに出てくる『狼人間』ほどの変身ではない。加奈は、クローゼットの横にある鏡の前に立つ。

そこにいたのは、人間の特徴をしっかりと保った十七歳の少女だった。

やや小柄ながら、バランス良く引き締まった体。お風呂上がりでまだ火照っているが、瑞々しさを保った肌色の皮膚。スポーツブラを押し上げるように、盛り上がっている胸。しっかりとした曲線を描いている腰。——おかしいのは、耳と尻尾だけである。

この現象が起こって以来、加奈の夜は決まって自分の部屋で過ごすなければならなくなった。

家族はもちろん、誰にもこのことは話していない。

隣の部屋から壮介の声が、壁越しに小さく聞こえてくる。

喋っている内容から、おそらく友人と電話でもしているのだろう。

「兄さん……」

呟きながら、加奈は再び自分の姿を見つめる。

こんなラフな格好をしているからかもしれないが、鏡に映っている自分は、変身前と違って妙に色気を帯びているような気がした。こんな、明らかに人間ではないモノが付いているのに。

【02】名前のない本との出会い

加奈に義理の兄ができたのは、高一の四月だった。

中学校に入る前に両親が離婚して、しばらく母親と二人っきりで生活を行ってきた。

母親はバリバリのキャリアウーマンであり、その頃には加奈も一人で家事をできる能力を持っていた。なので離婚後も生活自体に大きな問題はなく、月日が過ぎていった。

その後、母親は同じ仕事場で出会った男性と意気投合し、ついに再婚することになった。

ところが、その過程で一つ大きな問題が発生した。

それはお互いに、年頃の子供がいるということだった。

再婚相手にも壮介という名の子供がおり、歳は加奈より二つ年上。すでに大学への進学が決まっており、もしも再婚するのであれば、できれば加奈たちの家に住みたいというのが彼らの願いだった。壮介の大学は、加奈の家からだいぶん近い所にあるのだ。

母親側にも高校生になる娘がいることから、話し合いは慎重に進まれた。

加奈にとっても、兄ができるという話はいろんな意味で衝撃的だった。

これまで一人で暮らしてきた生活に、いきなり『兄』という存在が入ってくるのだ。

特に反発はしなかったが、期待もあり不安もあり——とにかく様々な感情が加奈の心を駆け巡った。

その間に起こした行動といえば、兄のいる友人に「実の兄ってどんな感じ？」と訊いたくらいだった。回答は、イマイチ実感に欠けるものだった。

当初は加奈も、壮介たちを受け入れるかだいぶ迷った。

何はともあれ、最終的には母親は再婚し、壮介たちは加奈のいる家に移り住むことになった。

その決め手となったのは、壮介たちと初めて会った時だった。

第一印象としては、どこにでもいるような優しそうな感じの青年だった。

実際、壮介は加奈も母親にも分け隔てることなく接して、人間的にもしつかりとした人だった。

壮介の家族について尋ねてみると、壮介は母親を幼い頃に事故で亡くし、それ以来、父親と二人三脚の生活をしてきたらしい。

こちらは離婚であるが、壮介も加奈と同じような境遇で過ごしてきたのだ。加奈もそんな壮介を見習って、血の繋がりに関係なく普通の家族として接していこうと心に決めた。

こうして、新たに義理の父と兄を入れての新しい生活が始まった。姓も変わり、新たに小高という姓になった。複雑な家庭事情であるが、壮介も義父も優しく接してくれて、加奈も家族がいることの幸せをそれなりに噛みしめながら日々の生活を送ってきた。

だが、生活していくうちに、加奈の中で壮介に対する『何か』が芽生えていった。

それは後に大きな葛藤となって、加奈を悩ませていくことになる。そして加奈が『例の本』と出会ったのは、高二の一月のことだった。

その日、加奈は壮介と二人で親戚の家に行くことになった。

親戚とは、壮介の母親の実家である。

母親が亡くなって久しい壮介だが、現在でもこうやって実家に訪問しているのは、純粹にすごいことだと加奈は思う。そして今回、彼女は初めて同行することになったのだ。

家に向かっている途中、加奈が声を落として言う。

「兄さん。本当に私が行っても大丈夫なのかな……」

「大丈夫。ばあちゃんに気さくで優しい人だから、心配することはないよ。それに、母さんにも新しい家族ができたって報告したいしな」

「でも、おばさんと私は血の繋がりもないし、あんまり関係ないように思うけど」

「いや、そんなことは絶対ないさ」

壮介は加奈に視線を合わせて断言する。

「父さんが結婚した以上、血の繋がりはなくても俺たちはもう立派な『家族』なんだ。だから加奈もそこらへんは気にしないで、俺にもばあちゃんにも接してほしいな」

「うん……そうだね」

その言葉に、加奈は複雑な思いを抱きながらも頷く。

家族。

最初の頃は、加奈も壮介を一人の『兄』として接してきたつもりだ。

でも、今は彼に対して特別な気持ちを抱かずにいられなかった。もしかしたら、壮介の血の繋がりを顧みない優しさが、加奈にこの気持ちを芽生えさせたのかもしれない。

そうこう考えているうちに、加奈たちは実家に到着した。

インターホンを押すと、白髪の女性が二人を迎えてくれた。

壮介と雰囲気の良い六十代くらいの女性で、どうやらこの人が壮介の祖母のようだった。

「いらつしゃい、壮介。初めまして加奈ちゃん。よく来てくれたわね」

「こんにちは、おばさん」

「あらっ。顔を見るのは初めてだけど、なかなか可愛い子じゃない！ 私の若いころにそっくり。こんなに美人だったら、カッコいい彼氏とか絶対いるでしょ？」

「いえ……そんな」

すると、祖母はニヤリと不敵な笑みを浮かべた。

「だったら、うちの壮介なんかとどうかしら？」

「えっ」

思わず言葉を詰まらせてしまう加奈に、壮介は笑いながら返した。

「ははは！　ばあちゃんも冗談が悪いなあ。俺と加奈はそんな関係じゃないって」

そう言いながら、壮介は真っ先に家が上がっていく。前で壮介と祖母が楽しそうに会話していく中、加奈は無言のまま二人の背中を眺めるしかなかった。

それから加奈たちは居間に入って、他愛のない雑談を交わした。彼の言うとおり、壮介の祖母は気さくで優しい人だった。

最初はだんまりとしていた加奈も次第に会話に参加するようになり、場もかなり盛り上がっていた。壮介の分け隔てなく接してくる性格は、どうやら祖母から受け継がれたようだった。

やがて頃合いになると、壮介が立ち上がった。

「じゃあ、母さんの所に行ってくるから。加奈、一緒に来てくれる？」

「うん」と、加奈もうなずく。

そして二人で奥にある和室へ向かった。

襖を開けて中に入ると、大きな仏壇が加奈を迎えてくれた。真ん中には一人の若い女性の遺影写真が置いてある。同性の加奈が一目置いてしまうほどの美人だった。

壮介と加奈は、仏壇の前に正座する。

「その写真が俺の母さん。もう死んで、だいぶ経つけどね」

「すごい美人だね。モデルさんみたい」

「別にそうだった仕事はやってなかったらしいけど、母さんの評判は死んだ後もよく耳にしたよ」

壮介は仏壇の鐘を鳴らして、両手を合わせる。加奈もそれに習う。そして目の前にある遺影を眺めながら、加奈は言った。

「お母さん、事故で死んじゃったんだよね」

「うん。父さんから聞いた話だと、交通事故だったらしい。しかも、事故を起こしたのは母さんの方でね。あやまって近くのカードレールに正面から衝突したんだ。幸い、他人を巻き込むことはなかったけど、その時に母さんは頭を強く打って——この通りだ」

「こんな所で言うのもおかしいけど、あんまり良い死に方じゃないね」

「見た人の証言だと、いきなり母さんの車がガードレールに突っ込んだらしい。だから、単純なハンドル操作のミスが原因だと言われているけど、詳細はよく分かっていないんだ。意地悪な人は、母さんは自殺したんじゃないかと言ってしまふ始末さ」

「そうなんだ……」

これ以上、仏壇の前で物騒な話をするのも抵抗があるので、加奈が会話を止めようとした矢先だった。

「壮介ー。ちよつと、こつちに来てちようだいー」

タイミング良く、遠くから壮介の祖母の声が聞こえてきた。

「どうした、ばあちゃん」と、壮介は大声で応える。

「お土産に何を持って帰るか、ちよつとこつちに来て選んでちようだいー」

「……つたく、しょうがないな」

やや呆れ顔になりながら、壮介は立ち上がって部屋から出ていった。

仏間に一人、ぽつんと加奈だけが取り残される。

特にやることもなかったので、何となく加奈は仏壇にいる壮介の母親と目を合わせた。

改めて見ると、本当に美しい女性だった。

髪は加奈とよく似た茶色。ほとんど推測の領域だが、壮介の祖母が「私の若い頃にそっくり」と言ったのも、あながち間違いではなさそうな気がした。

ふと、ここで加奈は仏間の隅に置いてあった、『ある物』に視線

が向いた。

それは壁際を背にして置いてある、小物サイズの紙袋だった。そこから何かがわずかに袋から突き出している。

「なんだろ」

手持ち無沙汰だったので、軽い気持ちで加奈は紙袋からそれを引っこ抜いてみる。

確認してみると、それは少し薄めのハードカバー本だった。

表紙も背表紙も具体的なタイトルもメーカー名も記載されておらず、質素なデザインが施されてあるだけ。中身を開いてみると、全くの無地のページが最後まで続いていた。

「メモ帳、なのかな」

ハードカバー本形式のメモ帳も珍しい気がするが、さすがにタイトルもなく無地のページだけが続いていると、そう判断せざるを得ない。

だが、このメモ帳らしき本を眺めながら、加奈はある不思議な衝動に囚われた。

——この本を自分の手元に置いておきたいと。

その直後、壮介が部屋に戻ってきた。

「なに見てるんだ、加奈」

「あつ、兄さん」

「なんだ、その本。どこで見つけたんだ？」

「その紙袋に入ってたの」

「もしかして、その本が欲しくなったのか？」

「え、ええつと……うん、そう」

妙なことに、加奈はきっぱり否定する気になれなかった。

「ふうん。じゃあ、ばあちゃんにちよつと訊いてくるよ」

そう言って、壮介は再び仏間を出ていく。そして五分も経たないうちに帰ってきて、真っ先に「持って帰っても良いって」と、オーケーサインを出してくれた。

「本当にいいの？」

「うん。ばあちゃんの話だと、その本は年末に家の押入れを大掃除している時に見つかったものらしいんだ。身に覚えのない本だったし、特に使う用途もないから、近いうちに捨てようと思ってたらしいぞ。良かったな、お目当ての物がもらえて」

機嫌良さそうに微笑む壮介に対し、加奈は再び例の本を見下ろす。壮介の祖母が身に覚えのない本ということとは、おそらく長い間押入れにしまわれていたことになるだろう。それにしてもほとんど紙が焼けておらず、時代的な『古さ』を全く感じられなかった。それだけ保存状態が良かったのだろうか。

こうして加奈は、名前のない不思議な本を手に入れたのだった。それから季節は冬を越えて、春が過ぎ——夏が目前に控える頃まで進む。

【03】バスタオル放り投げダッシュ

夕食の後かたづけを済ました加奈は、自分の部屋へと戻る。

時刻は午後八時。まだ、例の姿になるまで二時間ほどの余裕がある。

それに今日は父親と母親は仕事で帰ってこない。

いつもに比べて今日は多少の安心感を持って、一晚を過ごせそうだった。

加奈は机のイスに座ると、引き出しにしまっており『名前のない本』を取り出した。

中身を開くと、そこには下手くそな絵と文字が途中のページまで描かれてあった。画家の個性やクセが入っているというよりは、むしろ小学生が描いたようなものに近い。

本の内容は、簡潔にまとめられていた。

《——とある国の郊外にある大きな森。

そこに、頭の良い一匹のメスの狼が住んでいた。彼女は人間の言葉が理解することができ、その気になれば喋ることもできる大変優秀な狼だった。

そんな狼は、あるものに好意を寄せていた。

それは仲間のオスではなく、近くの村に住んでいる一人の人間の少年だった。

その少年はちよくちよく薬草を採るために森を訪れており、彼の姿を見ていくうちに狼は好意を抱いてしまった。しかし、人間にとって狼は害獣である存在。人間に見つかってしまった暁には、容赦なく猟銃を撃たれるため、そう簡単に少年の前に姿を現すことはで

きない。

そのため、狼はいつも遠目から少年の姿を眺めることしかできなかった――』

これ以降のページは、まだ何も描かれていなかった。

残りのページ数はまだ三分の二ほどあるので、物語もまだ始まったばかりなのだと推測できる。

しかし、肝心なのはこの物語を描いたのが、加奈ではないということだった。

この本自体が勝手に物語を進めていくのだ。

まるで加奈の見えない所で、透明人間の作家がこっそりと物語を描いているように。そのスピードは非常にまちまちで、何も描かれない日が一週間以上続くこともあれば、一晩のうちに何ページも進むことがある。

そして加奈にオオカミの尻尾と耳が生えてくる現象が起こったのも、例の本を家に持って帰ってきた直後だった。

初めて起こったときは、何が何だか分からずに困惑した。

あまりにも常識を越えた現象に、ただ戸惑うばかりで、つい衝動で尻尾を引き千切ろうとした。

だが、後に残ったのは尻尾の根本から発せられる痛みと、得体の知れない焦りと恐怖感だけだった。

こんな状態のまま、家族の前に姿を現せるはずがない。

絶望的な恐怖を抱きながら、加奈は一晩中ベッドに潜って過ごした。

ところが翌朝に目を覚ますと、耳と尻尾はすっかりと消えて無くなっていた。

どういう理屈かは分からないが、この現象が起こるのは夜だけで、朝と昼は耳と尻尾だけが体の中で眠っているかのように出てこないのだ。

なので、夜を除けば今のところ日常生活に大きな支障は出ていない。

とはいえ、家族や友人に相談できないまま、今日で四ヶ月が経とうとしていた。

最初の頃は時間が経てば勝手に出なくなるのかなとおぼろげな期待を抱いて、辛抱強く我慢していた。しかし、未だに解決する気配すら見せない状況に、加奈の精神力もそろそろ限界に近づいていた。「一生このままだったら、私、どうすればいいの……」

震える声で独り言を紡いで、加奈は本をぱたと閉じる。

時計を見れば、すでに八時半を過ぎていた。まだ一時間以上の余裕がある。

喉も乾いたので下から飲み物でも持ってこようと、加奈は部屋を出た。

加奈の家は二階建ての一軒家である。二階には三つの部屋があり、うち二つが加奈と壮介が使っている部屋。残りの一つは家の物置部屋として使われている。

一階に下りると、じめじめとした良い香りが彼女の鼻を刺激した。

——よく嗅いでみると、それは石鹸の香りだった。

まさかと思い、加奈は風呂場の方に向かってみると、案の定シャワーの音が小さく聞こえてきた。

「……そういえば、今日は父さんも母さんもいないんだっけ」

脱衣場の暖簾の前で、加奈はつぶやく。

小高家の風呂の順番は父親もしくは母親が先で、加奈たちは最後の方である。

今日は両親が帰ってこないの、こんな早い時間帯に壮介が入れたのだろう。加奈はいつも九時過ぎに入るので、それまでに壮介が出れば問題ない。

長風呂にならないといいんだけど……。

そう思いながら、加奈が暖簾の前から立ち去ろうとした瞬間だった。

暖簾の先で、兄が風呂場からあがった気配がした。

意外な展開に加奈はビクツと体を跳ねらせる。

目の前の暖簾のれんは布製で、長さも足首まで伸びているので加奈の場所からでは脱衣場の光景は見えないが、この状況を壮介に知られたら、あらぬ誤解を生んでしまうかもしれない。

恐る恐るとした足取りで、加奈は暖簾の前から立ち去ろうとした時だった。

「あつ。もしかして、そこにいるのは加奈？」

「ひゃあつ！」

暖簾越しからの壮介の声に、思わず加奈は素っ頓狂な声をあげてしまう。

条件反射で加奈は返した。

「う、うん。ちょっと、トイレに行こうかなと思って」

「ごめん。だったら行く前に、ちょっと頼みたい事があるんだ」

「えっ？」

壮介は困ったような声色で言った。

「実は、ここにバスタオルを持ってき忘れちゃってさ。おかげで体が拭けなくて……。俺の部屋にあるから、ちょっと持ってきてくれないか？」

加奈の家では、風呂用のバスタオルは各個人で管理している。

そのため、たまに自分の部屋にバスタオルを忘れてしまうことがあった。

特に家にやって来たばかりの壮介と義父は、たびたびそのような事態を起こしてしまい、よく加奈たちを困らせていた。

「そ、それくらい自分で持ってきてよ！ 今日母さんたちもいないんだから！」

「でも、びしょ濡れのまま二階まで行けないよ。……なあ、妹にこんなことを頼むのも何か申し訳ないけど、たのむっ！ 持ってきてくれっ！」

「あー。もう、分かったわよ」

ついでにバカという捨て台詞でも残していこうかと考えたが、結局、加奈は何も言わずに風呂場から離れることにした。

さっさと二階へと上って、壮介の部屋に入る。

部屋の中は整理整頓がしっかりなされており、加奈のイメージする男性の部屋とはまるで異なっていた。鼻で息をすると、不快感を起こさない程度の——少し汗の含んだような匂いがした。

思えば、こうやって一人で壮介の部屋に入るのは初めてのことだった。

やがて加奈は、隅の方に吊されているバスタオルを発見して、手に取る。

——その瞬間、ふと加奈は『ある問題』を思いついた。

それはこのバスタオルを、どうやって壮介に渡せばいいのかだ。もし、ごく普通に手渡しをするのであれば、一瞬でも加奈は壮介の姿を見ざるを得なくなってしまう。

一糸まとわぬ、彼の姿を——。

それを頭に思い浮かべた瞬間、加奈の心臓が大きく跳ねた。

「あつ……」

それと共に、加奈の身に信じられないような現象が起こった。

まだ夜の十時に到達していないのに、いきなり彼女の頭から『オカミの耳』が生えてきたのだ。

それだけでなく腰の方からも、何かが出てくるような感触が襲ってきた。スカートの尻の部分に異様に盛り上がり、同時にそこから痛みがはしる。

「いたい、いたい！」

慌てて加奈はスカートを脱ぎ、下着の位置を少し下げる。

そして茶色のオカミの尻尾が解放されたように、加奈の腰から突き出てきた。こうなってしまうと、次の朝までズボンやスカートの類は穿けなくなる。

尻尾を凝視していくうちに、次第に加奈の中で焦りが大きくなっていった。

最初に出てきたのは、この状態だと壮介にバスタオルを渡せないという考えだった。かといって頼まれた以上、このまま放置しておくわけにもいかない。

「どうしよう……」

バスタオルを握りながら、加奈は体を震わせる。

「加奈——っ。まだか——っ！」

下から兄の声が微かに聞こえてくる。あまり時間は残されていないようだ。

こうなったら、イチかバチである。

加奈は大きく息を吐いて、強引な作戦を決行することにした。

「いま行くよー。兄さんー」

平静に声を紡ぎながら加奈は上の服も脱いで、いつもの下着姿になる。

それから壮介の部屋を出て、脱いだ服を自分の部屋に放り投げってから、急いで一階の脱衣所へと向かう。オオカミの姿で部屋の外に出るのは、これが三度目のことだった。

そして脱衣所の前に辿り着いた加奈は、真っ先に叫んだ。

「兄さん、ごめん！ トイレが近いから、そこに投げておくよ！」

加奈は脱衣所の暖簾に向けて、バスタオルを放り投げる。

ひらひらとバスタオルが空中を舞っている最中、加奈は脱衣所の後方にあるトイレへ超特急で駆け込んだ。ガチリとカギを閉めて、ドスンと便座に座る。もちろんトイレが近いのはウソなので、下着は穿いたままで。

その直後、トイレの外で壮介が暖簾から出てくる気配がした。

「ごめん、加奈。本当にありがとな」

外から兄の感謝の言葉を聞いた途端、加奈はため息と共にがつくりと便座にうなだれた。

便器と背中 사이에 尻尾が挟まれる格好になり、尻尾からわずかな痛みを感じる。

強引な作戦だったが、ひとまず壮介に見られずに済んだ。

加奈は再び安堵の息を吐くと同時に、今の状況を改めて振り返った。

今日まで十時前に、耳と尻尾が出てくることは一度もなかった。基本、家族は夕食を食べ終わるとそれぞれの部屋にこもってしまうので、どうしてもトイレに行きたくなった時でも周りに注意していれば、見つかることはまずなかった。

でも、今日は本当にギリギリの所だった。

「よりによって、どうしてこんなタイミングに出てくるのよ……」ギュギュツと背中を力を入れて、加奈は忌まわしい尻尾を押しつぶす。

十時以前にも耳と尻尾が出てくるようだったら、今後の夜の生活においてもさらに警戒しなければならなくなる。今日は両親が不在で本当に助かった。

外では着替え終わったらしい壮介がトイレの前を通って、二階に上っていく気配がした。

とはいえ油断は禁物なので、もう少し時間を置いてからトイレを出ることにする。

待っている間、加奈は壮介のことを考えた。

思えばオオカミの耳と尻尾が生えてきたのは、バスタオルを渡すときに壮介の裸を見てしまうことを思い浮かべた瞬間のことだった。加奈も十七歳の少女である。

口では言わずとも、ふとした拍子に異性の裸を思い浮かべたり、不埒な妄想に走ってしまったりする時だってある。

しかし、兄のことを思い浮かべた時は、何かがおかしかった。他人の裸を妄想するときには絶対に出てこない、体の中で熱いものが猛烈に吹き出して、全身を駆け巡っていく感覚が襲ってくるのだ。その感覚は一瞬だけ『我』を忘れてしまうくらいに大きく、なぜだか抗えない魅力があった。

その理由が分からないほど、加奈も鈍感ではない。

どうやら、自分は壮介に『好意』を持ってしまったようだ。

だが、たとえ血は繋がっていなくとも、自分と壮介は立派な『兄妹』なのだ。許されることではないと加奈も自覚しているし、壮介も自分のことを一人の妹として接している。

「やっぱり……ダメだよね」

ポツリとつぶやいてから、加奈は重たい腰をあげる。

小さくトイレのドアを開けて、誰もいないことを確認した後、ようやくトイレから脱出を果たした。そして壮介に見つからないように、こっそりと階段を上って自分の部屋へ戻っていった。

ドアのカギを閉めた後、ふと加奈は机に置いてある本に目が留まる。

妙な胸騒ぎがした。

今日は早い段階で耳と尻尾が出てきたのだ。念のため加奈は本を手にとって中身を確認すると、そこには驚くべき結果が待っていた。例の物語が十ページほど進められてあったのだ。加奈は部屋を出る前に一度、その本を見ている。これだけの量がこんな短時間で進んだのは、初めてのことだった。

これが良い兆候なのか悪い兆候なのか。

さっぱり検討がつかないながらも、加奈は恐る恐る、そしてじつくりと新しく描かれた内容に目を通した。

【04】悩めるオオカミ少女の恋心

「小高、どうした？　なんか、めっちゃ疲れたような顔をしてるぞ」
翌日、学校の休み時間。

前の席に座っている浩史が、こちらに体を向けながら心配そうに声をかけてきた。

ぼんやりとしていた加奈はハッと我に返り、慌てて首を振る。

「そ、そう？　私は普通にしているつもりだけど」

「でも、さっきからボーッと窓の外を見てるだけじゃないか」

浩史の指摘に、加奈は「あはは」と苦笑してごまかすことしかできない。

彼女の座っている席は、窓側の四列目にある。

半分開けられている窓からは涼しい初夏の風が入ってきて、とても気持ちいい。浩史の言う通り、それに当てられながら加奈は今まで外の景色をぼんやりと眺めていたのだ。

浩史がさらに問う。

「もしかして、体調でも悪いのか？」

「昨日はよく眠れなかったからね。多分、寝不足だと思う」

「顔色もかなり悪そうだな。ヤバかったら、今の休み時間中に保健室に行ったほうがいいんじゃないか？　先生には俺が言っておいてやるからさ」

「うっん、本当に大丈夫だから気にしないで。心配してくれてありがとう、北嶋くん」

「……なら、いいんだけど」

浩史はしぶしぶ頷いて、体を元の向きに戻す。

内向的な性格の加奈にとって、浩史はとても貴重な男友達だった。四月の席替えの時に、前の席となった彼が最初に話しかけてきた

ことがきっかけで、それ以来、他愛のない会話を交わす程度の仲になった。地味でクラスでもあまり目立たないタイプの彼だが、優しくしっかりとした性格は壮介と似ている所があり、加奈も好感を持っている。

その友人に分かってしまふくらい、今の自分は顔色が悪いのだから。

加奈はため息を吐いた。

浩史の言う通り、ここ最近の体調はあまり良くなかった。

なかなか寝付けない夜が日増しに多くなり、授業中にボーッとしてしまうことも頻繁になった。特に昨日の夜は、例の本を読んだ直後だけあって、とても満足に眠ることができなかった。

視線を浩史から再び外に向けようとした時だった。

「加奈。もしかして何か悩みでもあるの？」

浩史に釣られてか、隣の席に座っている友人の史織も尋ねてきた。

「そ、そんな……いきなり悩み事って何よ」

「だって、単なる寝不足にしては暗い顔をしているからね。それに加奈は自覚していないだろうけど——最近の加奈、ちょっとおかしいわよ。何かあったの？」

「だから何ともないって。もう、史織ったら急にどうしたのよ」

史織は加奈の顔をじっと眺めて、やがて微笑みながら言った。

「もしかして、好きな人でもできたのかなって」

一瞬にして眠気が吹き飛んだ。

それと同時に、なぜか前の席の浩史が体を跳ねさせたようにも見えたが、そんなことに構ってはいられない。

「ど、どうして、そうなるのよっ！」

「そういえば加奈って今、誰とも付き合っていないよね。もしかして新しく好きな人ができちゃったから、どうやってアプローチしようか悩んでいるのかなって思ってる。もしかして、うちのクラスの男子？」

加奈の態度がそんなに面白かったのか、ニヤニヤと微笑みながら

言う史織。

さらに加奈が言い返そうとした瞬間、タイミングが悪く次の時間の先生が入ってきたので、それは叶わなくなってしまった。直後にチャイムが鳴る。

慌てて授業の準備を始めながら、加奈は隣の史織を軽く睨みつける。

気付いた友人は微笑みながら手を振って、そのまま授業に戻った。「もう、史織のバカ……」

これ以上、怒っても仕方ないので、彼女も授業に集中しようとする。

だが、二十分も経つと眠気が襲ってきて、頻繁にあくびをするようになった。

このままぼんやりとしていても仕方ないので、加奈は昨晚の事を思い返す。

昨晚の間に、進められた分の本の内容は簡潔にまとめるところだった。

《——村の少年のことが好きになってしまった、一匹のメス狼。

どうしても少年と仲良くなりたかった狼はある日、森の奥にある魔法使いの家に行った。

その魔法使いは、どんな狼でも人間になれるという薬を持っていた。その噂を聞きつけて、狼は魔法使いの隠れ家にやってきたのだ。狼は、人間になれる薬が欲しいと頼んだ。

魔法使いは狼の頼みを承諾した。

だが、この薬には大きなリスクが三つあるとも説明した。

一つ目は、一本ごとに人間になれる時間が限られていること。

二つ目は、飲みすぎると副作用で取り返しのつかないことが起こること。

最後に三つ目は、体に大きな衝撃を受けてしまうと、その反動で

薬の効果が切れてしまうことだった。それでも狼は持っていた財産の半分を渡して、人間になれる薬を何十本も手に入れた。

そして、狼は薬を飲んで人間の少女に変身。

ついに村の少年へと近づいていくのだった――」

中身の物語も、ようやく動き始めたというのが率直な感想だった。その内容を読み進めていくうちに、加奈は次第に『ある印象』を抱かずにいらなくなった。

それは、作中に出てくる狼が自分と重なっているということだった。

実際、夜になると、自分の体にオオカミの耳と尻尾が生えてくる。だからと言って今の状況が変わるわけでもないし、単なる推論の範囲内であるが、あの本がきっかけで奇妙な現象が起こり始めたのも事実なので、気になる所でもあった。

……やっぱり、あの本が鍵を握っているのかな。

窓からの風を浴びながら、加奈は考える。

昨日は十ページほど進んだことによって、物語もようやく半分が過ぎた。

もしかしたら、あの本の物語が終わった瞬間、加奈の身にも何らかの変化が起こるのではないかという予感もあるにはあった。

「うっ――」

その時、ぐらりと加奈の視界が揺らいだ。

寝不足による、突発性のめまいだった。あまりにも唐突な出来事だったので、加奈はそれを制御することができなかった。

何事もなく授業が進められていた教室に、ゴツンと激突する音が響き渡った。

と、同時に教室中の視線が一斉に加奈の方に来る。

「い、いたたたっ……」

赤く腫れたおでこを撫でながら、加奈は唸る。

その様子をうかがった若手の教師が、怒るよりむしろ心配そうな声を掛けてきた。

「どうした、小高。大丈夫か？」

「な、何とか……」

直後、いきなり前の席の浩史が立ち上がった。

「せんせーっ！ 小高の体調が悪そうなので、保健室に連れて行ってもいいですか？」

突然の事態にさらに目を丸くさせる教師に、彼は慌てて付け加える。

「じ、実は休み時間中も小高の顔色が悪かったので、保健室に行くように俺が言ったんですけど、小高が聞いてくれなくて。だから、連れて行ったほうがいいと思ったんです」

提案してきたのは普段、真面目に勉強している浩史である。

「まあ、北嶋がそう言うんだったら、それで構わないが……」

と、教師も授業をサボる口実ではないと判断したのか、同行を許可してくれた。

「さっ。小高、行くぞ」

「えっ、でも」

「今さら、言い訳しても仕方ないだろ」と、浩史が小声でつぶやく。
「う、うん……」

おぼつかない足取りで加奈も浩史と同様に、席から立ち上がった。一時は教師に怒られるかと焦ったが、浩史のファインプレーで一応怒られずに済んだ。寝不足で気分が悪いのは一応、本当ではあるが。こうして、加奈は浩史の付き添いで教室を出ていった。

保健の教師は、寝不足による体調不良だと診断してくれた。顔色も相当ひどかったらしく、しばらくはベッドで安静にするようにと言われてしまった。

ベッドに横になった加奈に、浩史が話しかける。

「小高。あんまり無理するなよ」

「うん……ごめん。さっきはありがとう」

保健の教師は加奈の診断の後、他の用があつたため保健室から出て行ってしまった。

おまけに他の生徒も来ていないので、今は室内に加奈と浩史しかいなかった。

「じゃあ、ちよつと一眠りするね。少し休んだら、また教室に戻るから」

「分かった」

そう頷いた浩史だったが、なかなかベッドの横から離れようとならない。

「どうしたの？」

加奈が尋ねた瞬間、浩史はなぜか彼女から目を逸らす。

その顔は、なぜか青ざめているようにも見えた。

「あ、あのさ……」

「もう、一体どうしたのよ」

何が何だか分からないまま尋ねる加奈に、やがて浩史は首を振った。

「ううん。やっぱり、なんでもないや」

「ええっ。あれだけ振っておいて、それはないでしょー」

浩史はごまかすように微笑む。

「いや、あまりにも小高が体調悪そうだったから、一つや二つ励ましの言葉でも贈ろうかなと思っただけど、なんか急にアホっぽく感じちゃって、ああなっちゃったんだ」

「なんか、ものすごく下手くそな言い訳に聞こえるけど」

「ま、まあ、それはいいとして――。俺も早く教室に帰らなくっちゃいけないし、そろそろ行くよ。そんじゃ、また後でな」

軽く手を振って、浩史はそそくさと保健室から出て行ってしまった。

「変な奴……」

急に静まりかえった室内で、ベッドで寝る体勢になる。

ぼんやりとまだ意識がある中、加奈は先ほどの史織の言葉を思い返した。

——もしかして、好きな人ができたの？

友人が言ったことは、おそらく大部分が正しいだろう。

しかし、その一方で妙に断定できない所もあった。

この十七年間、加奈は『彼氏』というものを持ったことがなかった。

当然、キスの味と感触など経験したことがないし、肉体関係など論外である。

かといって恋愛に消極的というわけでもなく、単に何となくきつかけが掴めずに今日まで来てしまったのだ。未だに恋愛を体験していないこともあって、異性と付き合うことには多少の恐怖感はある。でも、やはり期待感の方が圧倒的に大きい。

あえて理想を言うならば、壮介のように優しくて自分を大切にしてくれる人と付き合いたい。

実際、友人の史織も部活の後輩と付き合っていると聞く。

できれば相談なんかしたりして、恋愛に関するアドバイスなんかを受けてみたい。

しかし、自分が未だに男性と付き合ったことがない事实は、それはそれで加奈にとっては軽いコンプレックスでもあった。

おまけに今の自分は義理の兄に対して、特別な感情を抱いているのだ。

そんなこと打ち明けた暁には、さすがの友人も表面上はともかく

——心の中では自分のことを穏やかな目で見てくれないだろうと、何となく想像できた。

その結果、今まで誰にも相談できず、いたずらに時間を費やしてしまった。

おそらく、他人になかなか自分の内面を話せない性格も要因して

いるかもしれない。

「はあ……」

こみ上がってくるもどかしさを抑えて、加奈は軽く枕を叩く。

ここ最近、そういったフラストレーションを抑えるだけでも、大きく精神力を使うようになった。とはいえ、体が疲れているのは確かかなようで、横になっていくうちにウトウトと眠気がやってきた。

今は耳と尻尾が生えていない。だから安心して眠れる。

結局、加奈は保健の教師に起こされるまで、二時間もぐっすり眠ってしまった。

【05】悩めるオオカミ少女の誘惑

季節は初夏が過ぎ、いよいよ本格的な夏がやってこようとしていた。

加奈に起こる現象も日を追うごとに悪化しており、この頃になると、夜の九時前には普通の姿でいられなくなってしまっていた。

お風呂の時間も母親に適当な理由を作って、八時半に入らせてもらうようにした。

そして、例の本の物語も少しずつであるが進展していった。

《——村の少年と親しくなるため、ついに人間になれる薬を手に入れたメスの狼。

彼女は薬を飲んで少女の姿になって、その少年に会っていった。もともと頭の良い狼だったので、少年と親しくなるまで時間はかからなかった。

最初の時点では狼も薬が尽きたら、そのまま森の生活に戻ろうと考えていた。しかし、少年と親しくなっていくたび、狼の中で徐々に彼から離れたくない感情が大きくなっていった——》

物語の狼も、だいぶ心苦しい状態に陥っているようだった。

それは加奈も同様で、一向に改善しない状況に精神的にもそろそろ限界だった。

すでに、例の現象が起こってから半年が経った。

今日まで家族の誰にも見つかっていないことだけでも奇跡に近いが、状況が悪化している今、バレてしまうのも時間の問題だった。

もし壮介や家族に見つかってしまった場合、自分はどうなってしまうのか。

遠くの病院にでも連れて行かれて、壮介と離ればなれの生活をしなければならぬのか。

怖くて、加奈はこれ以上の想像が出来なかった。

「加奈。どうしたの？　なんか、すごく疲れたような顔をしてるわよ」

ある日の食卓、加奈の母親が心配そうに声を掛けてきた。

加奈は箸を止めて、首を振る。

「そう？　私は割と普通にしてるつもりだけど」

「でも、目の下はやたら黒いし、顔色も良くないわよ。まだ本格的な受験シーズンに入っているわけでもないし……一体、どうしたの？」

「レポートの課題が遅れて、ちょっと寝不足気味なの。だから気にしないで」

微笑を送って、加奈は再び食事に戻る。

もちろんこれはウソである。

例の現象が起こって以来、何とか勉強する努力は怠らなかったのに、成績に関しては今のところ維持しているが、相変わらず寝不足の日々は続いていた。

母親は加奈の言葉を信じたようで、近くの棚の引き出しから睡眠薬の箱を取り出してきた。

「だったら、勉強を頑張っている加奈にこれをあげるわ。私、仕事の関係でよく外泊するけど、昔は家以外の場所だと変に落ち着かなくて眠れなくてね。あと二粒しか残ってないけど、眠れなかったらこれを使って。即効性があるって良く効くわよ」

「いらないよ、そんなの」

「どうしても眠れない時でいいから。でも、使う時はしっかり自己責任でね」

「……じゃあ、もらっておくよ」

加奈に箱を渡した母親は、今度は隣の壮介に話しかけた。

「そういえば、壮介くん。この前、ゲーム機を買ったそうね」

「うん。前々から欲しかったから、ちよつと奮発してね」

「自分のお金で買った分にはいいけど、あまりやりすぎちゃだめよ」

「分かってるって。でも、前から欲しかったゲームだからなあ」

「まあ、そんなに気にしなくてもいいわよ。さっき加奈にも言ったけど、そこは自己責任でね」

「ははは！　ありがとう、おばさん」

壮介が笑ったのに釣られて、義父も母親もつい笑みを浮かべてしまふ。

彼の笑顔は、周りの人間をついつい笑わせてしまふ不思議な魅力がある。

加奈も微笑を浮かべながら、残りのお茶を飲む。

誰から見ても、幸せそうな家族の光景だった。これが再婚同士の家庭だと思つと、本当に自分たちは相手に恵まれたのだと言わざるを得ない。

思えば、加奈がこういつた大人数で食べることによるご飯のおいしさを再確認できたのも、壮介たちのおかげだった。

加奈の実の両親が離婚したのは中学校に入る前だったが、実質上は彼女が小四の頃にはすでにお互いに別居状態だった。母親の仕事も忙しかった時期なので、その頃から加奈はいつも一人で夕食を作つて食べていた。もともと一人っ子だったこともあり、テレビを点けながら一人でポツンとご飯を食べる分には、そんなに寂しさを感じることにはなかった。

しかし、一方では自分の作るご飯が妙に味気なかったのも否定できなかった。

出来映えに関係なく、いつもおぼろげに何かが足りないような気

分で食べていたのだ。

——これが、ありきたりの幸せと言うのかな。

三人の会話に耳を傾けながら、加奈はふと思う。

食事は大人数で食べたほうがおいしいとよく言われるが、壮介たちがやってきたことによつて、加奈は初めてその言葉に大いに納得させられた。

家族と一緒に食べていると、一人の時に感じていた味気なさがウソのように無くなったのだ。

そして同時に、その幸せを壊すようなことを絶対にやってはいけなとも思つた。

具体的なことを述べるなら、加奈と壮介が兄妹を越えた関係になることだ。今の光景はあくまでこの場にいる四人が、それぞれを『家族』として接しているからこそその結果だ。

でも、自分は――。

食事を平らげた加奈は、壮介に声をかける。

「兄さん。ちょっとお願いがあるんだけど」

「んっ。どうした」

「学校の宿題で分からない所があつて、ちょっと助けてほしいの」

「ああ、いいよ。後で加奈の部屋に行くから」

「ありがと」

礼を述べて、加奈は先に夕食の席から出る。

最近の自分は、壮介を『一人の家族』として見ているのか、自分でもよく分からなくなっていた。

しばらく部屋で待機していると、コンコンとドアがノックされた。

「入るよ、加奈」

「うん……。いいよ」

妙に胸が高鳴っている加奈とは裏腹に、壮介はいたって平静な様

子で部屋に入ってきた。

自分から誘ったとはいえ、やはり異性を自分の部屋に入らせるのは緊張する。

以前、中間テストの勉強のため、浩史を部屋に呼んだことがあるが、その時は史織といった同性の友人が圧倒的に多かったので、そこまで気にすることはなかった。

イスに腰掛けた加奈は、リュックから数？の教科書を取り出す。持ってきたうちわをぱたぱたと動かしながら、壮介は嫌な顔をした。

現在、加奈の部屋のクーラーは壊れているので、わざわざ部屋から持ってきたらしい。

「よりによって数？かよ。それ結構、難しいんだよな。俺も高校の頃にやったことあるけど、すごく苦労した思い出しかない」

「兄さん、解けそう？」

「まあ、何とか。教えられるだけのことは教えてやるさ」

別のイスを用意して、壮介は加奈の横で説明を始める。

至近距離から感じる声や匂いに時折、集中力を乱しながらも、加奈はペンを進めていく。

壮介の教えはややぎこちないながらも、要点はきつちりと押さえてあったため、問題自体は順調に進んでいった。文系の大学に入っている彼のことなので、最初は複雑な数式にギブアップしてしまうんじゃないかと心配したが、杞憂に終わった。

だが、半分ほど問題を解いた時だった。

加奈は自分でも信じられないような言葉を発した。

「兄さん。ちょっと脱いでもいい？」

壮介のうちわを動かす手が止まる。

「えっ？」

疑問符を浮かべる壮介に対し、加奈はシャツをぱたぱたと動かしながら言う。

「ほら。部屋がすごく暑いから、上のシャツだけでも脱ぎたいのよ。」

もう汗でベトベトだし、このままだと勉強に集中できないわよ……」
まるで何かに操られているように、口調は滑らかだった。

まだ梅雨が明けていないとはいえ、連日、ジメジメした暑さが続いている。

おまけに加奈の部屋のクーラーは現在壊れており、今までお互いに暑い思いをしながら勉強をしていたのだ。教える側の壮介はうちわを持っているから良いにしても、ペンを持っている加奈には涼む手段がなかった。

壮介はぎこちなく頷く。

「この部屋、すごく暑いから……。別にいいんじゃないか」

「ありがと」

加奈はイスから立ち上がってシャツを脱ぎ、ベッドに放り投げる。

「ふうっ。それにしても暑いわねー」

そして、上半身はスポーツブラの姿のままでイスに座った。

当然ながら、その下は何も着ていない。

壮介は何とも言えないような表情でつぶやいた。

「加奈……。さすがの俺もそれだと目のやり場に困るから、何か新しいシャツでも着ろよ」

「えーっ。でも、暑いじゃない。私はこのままでも平気だから、続けようよ」

「……ったく、しょうがないな」

小さく息を吐いて、壮介は勉強を再開する。

なるべく加奈の方を向かないで、机の教科書を見ながら指導している姿はなんとも実直な兄らしい。

しばらくは両者とも会話をせず、ペンを動かす音だけが部屋に響いた。

問題を解く要領もそろそろ分かってきたので、次第に加奈もペンを動かす手も速くなっていった。

それと同じように、加奈の心臓も鼓動もどんどん速くなっていった。もしかしたら、隣の壮介にも聞こえてしまっんじゃないかから

いの暴れようだった。

それから二十分ほど経ち、加奈はついに全ての問題を解き終わった。

「ふうーっ。やっと終わった」

体を伸ばしてイスにもたれかかっているうちに、壮介が立ち上がった。

「良かったな、早めに終わって。じゃあ、俺は部屋に戻るから」

照れくさいのか、加奈の返事も聞くことなく、そそくさと壮介は部屋から出てしまった。

そしてドアが閉まったと同時に――。

加奈の中で、羞恥心という感情がようやく芽生えてきた。

「えっ……私、どうして……」

半信半疑のまま、加奈は恐る恐る自分の姿を見下ろす。

下はまだスカートを穿いているとはいえ、こんな恥ずかしい姿でさつきまで壮介と勉強していたのだ。

まるで、彼を誘惑していたかのように。

いったい何が起こったのだ。

いくら部屋が暑いからといえ、いつもの加奈だったら同じ状況でもシャツを脱がずに、そのまま我慢して着続けたはずだ。なのに、あの時の自分は何かに取り憑かれたように、あっさりとシャツを脱いでしまったのだ。おかしい、おかしすぎる。

加奈の中で、急に得体の知れない恐怖感が襲ってきた。

相手が恋人ならともかく、どうして壮介の前であんなことをしてしまったのか。

それにシャツを脱いだ自分は、壮介に対してどんなリアクションを期待していたのだろうか。

何となく想像できたが、それ以上のことは加奈も考えられなかった。

【06】悩めるオオカミ少女の困惑

「……好きです。どうか、俺と付き合ってくださいませんか？」

浩史から告白を受けたのは、それから一週間後の金曜日のことだった。

目の前で頭を下げている浩史に、加奈はただただ困惑する。

帰りのホームルームが始まる前に、いきなり浩史が加奈に「放課後に一人で屋上にやってきてくれないか」と誘ってきた。何が何だか分からずに、とりあえず彼の言う通りに行ってみたところ、頬を赤くしながら待っていた彼が急に頭を下げてきたのだ。

「え、ええっと……」

どうすればいいか分からず、加奈は目の前の浩史を眺める。

浩史は頭を上げて、やや開き直ったように言った。

「やっぱり、俺じゃダメか？」

「な、なに言ってるの。そんなわけないじゃない」

「じゃ、じゃあ、付き合ってくれるのか？」

「だから、そういうことでもなくて！」

完全に答えになっていない返答だった。

頭を振って、加奈は何とか気分を落ち着かせる。

生まれて初めて異性に告白された。——しかも相手は、仲の良いクラスメイトの浩史だ。

その事実だけでも加奈を困惑させるに充分だった。

「どうして、こんな時期にいきなり告白なんて」

「あと少して一学期も終わりだろ。そしたら二学期まで小高に会えないと考えると、急に我慢できなくなってきた……。それで告白するんだったら、テスト期間まで余裕ある今のうちにと考えたんだ」「いつ頃から、そんな気になったの」

「つい最近。最初は席も近かったし、何となく話しかけただけなんだけど——なんか、小高と一緒になっていくうちに、どんどん楽しくなってきた……。俺、女の子と付き合ったことないから、最初はよく分からなかったんだけど、そのうちに『ああ、これが好きになったということなのかな』と、実感するようになって」

「そう、なの……」

二人の間に風が吹き荒れる。

浩史の性格は加奈もよく知っているし、付き合うには申し分ない相手である。

しかし、即座にイエスと答えられるほど簡単な問題でもなかった。加奈が返事に困っている間に、浩史がやや青ざめたような顔で尋ねた。

「なあ、こんな所で蒸し返すのもおかしいかもしれないけど、やっぱり一ヶ月前に中村が言ってたことって本当なのか？」

「一ヶ月前？」

「ホラ。小高が授業中にブツ倒れて、保健室に行った日。その授業前に、中村が冗談半分で言ってたことだよ。『もしかして、好きな人ができた？』って……」

中村とは史織の名字である。加奈は即座に首を振った。

「あ、あれは史織が勝手に言ったことでしょ！」

「じゃあ、今は好きな人はいないのか？」

「そ、それは……」

加奈はうつむいて、口を閉ざしてしまった。

非常に微妙な質問だった。もし、ここでイエスカノーの答えを出しても、どちらとも当たっているようであり、間違っているような気がした。優柔不断で情けないにも程があるが、今の加奈には具体的な回答をすることができなかった。

そんな加奈の態度をうかがってか、浩史は手を振った。

「うつん。やっぱごめん。やっぱり、その話は無かったことにしてだ——。小高、今すぐに返事することはできないか？」

「……ごめん。いろいろと頭がこんがらがっちゃって」

「じゃあ、今じゃなくていい。少し考える時間をあげるから、休日中に返事することはできないか？　なんだったら俺が直接、小高の家に行ってもいいし」

「……………」

次の言葉がなかなか浮かんでこない。

そんな加奈に、壮介は一呼吸間を置いてから続けた。

「仕方ないな。だったら、返事は次の月曜日の朝にするってどうだ。ホームルームの三十分前だったら、まだ教室に誰もいないと思うし、小高もそれまでに考えておいて、その時に返事をするってどうだ？」
「……うん。分かった。月曜日までに考えとく」

「あ、ありがとう。じゃあ、お先！」

それ以上は何も言わず、そそくさと浩史は屋上を去ってしまった。ぼつんと残された加奈は、ガタンと閉まる屋上のドアを眺めながら、自分の胸をギュツと掴む。

異性に告白された実感と心苦しさ。

それと同時に、あまりの自分の優柔不断さにも心苦しさを抱くのがあった。

ぼんやりとした足取りで家に帰ってくると、玄関で壮介と鉢合わせた。

「よう加奈。おかえり」

「……ただいま」

そのまま靴を脱いで、二階の部屋に戻ろうとした時だった。

「加奈？　だいぶ顔色が悪そうけど、大丈夫か？」

壮介が前に塞がって、彼女の両肩にそっと手を置いたのだ。心配そうに見つめる壮介と目が合う。

その瞬間、加奈の中でなぜだか悔しさがこみ上がってきた。

おそらく壮介は、加奈を『自分の妹』として心配しているのだらう。

常識的にはそれが当然の反応かもしれない。壮介は決して、加奈に対して家族の一員を越えた関係など望んでいなければ——第一、そんな発想すら抱いていないだろう。

本当は自分のことを『別の眼』で見してほしい。理性では叶わぬ願いだと分かっている。

でも、加奈は壮介に対して理不尽な怒りを抑えることができなかった。

「ほつといて！」

声を荒げた加奈は、彼の体を突き飛ばす。

あまりのことに呆然とする壮介を横目に、加奈は駆け足で部屋に戻って、ドアを閉めた。

息を整えていくうちに、どんどん後悔の念が襲ってきた。

せっかく壮介が心配してくれたのに、それを突き飛ばしてしまうとは衝動的だったとはいえ、恩を仇で返すようなものだ。いくら優しい性格の壮介でも、あれには少なからず焦っているかもしれない。「は、早く謝りに行かなくっちゃ……」

気分を落ち着かせて、とにかく加奈は部屋を出ようとした瞬間。例の奇妙な感覚が襲ってきた。

為す術なく、加奈の体にオオカミの耳と尻尾が生えてきてしまった。

——そんなつ。

ひとまず制服を脱ぎながらも、加奈の焦りは最高潮に達した。

まだ日も沈んでいない時間帯なのに、オオカミと化してしまったのだ。

日ごとに時間が早くなっていく兆候は自覚していたものの、それでも昨日に比べて一時間以上も早くなった。これでは壮介に謝るところか、今日は寝るまで部屋から出られなくなってしまった。

幸い、両親は仕事の関係で日曜日まで帰ってこないの、今日と

明日は何とか切り抜けられる。

だが、その後はどうしようもなかった。風呂の時間は早めることはできても、家族揃っての夕食の時間は早めることができない。

いよいよ、日常生活に支障をきたす所まで症状が進行してしまっ
た。

本当だったら、休日中に浩史と付き合うかどうかじっくり考える
つもりだった。

でも、そんな場合ではなくなった。これから自分は、どうやって
この症状を隠し通せばいいのか。考えれば考えるほど、加奈の中で
どうしようもない絶望感が大きくなっていった。

もう、我慢の限界だった――。

いっそのこと周りの視線なんて顧みずに、この姿で病院に行った
ほうが自分のためなんかじゃないかと思うようにもなった。

ふとここで加奈の視線が、机の引き出しを捉えた。

「あつ……本！」

この瞬間、ようやく彼女は例の本の存在を思い出した。

以前、兄のバスタオルを取りに行った日に十ページ以上、話が進
んだことがあった。

その日も今日と同じように、通常の時間より早くオオカミの耳と
尻尾が出てきてしまった。

もしかしたらと思い、加奈は引き出しから本を取りだして開いて
みる。

案の定、物語はページの終盤まで更新されていた。

《――人間になれる薬を使って少女に変身し、少年との交流を深め
ていった狼。

しかし、少年と仲良くなっていくにつれ、狼の体も刻々と限界に
近づいていた。

人間になれる薬は強力な分、副作用もひどい。

これ以上の服用は身を滅ぼすと、魔法使いからも警告された。

それでも、狼は少年に対する想いを抑えることができなかった。

魔法使いの警告にも耳を傾けず、全財産をはたいて人間になれる薬を買い続けた。

やがて、その薬も最後の一本となり、ついに狼は少年と別れなければならぬ日がやってきた。

別れの日、いつものように狼は少女に変身して少年の家に向かった。

中に入ると、少年は部屋のベッドで一人ぐっすりと眠っていた。

もう二度と、自分は間近で少年の顔を見ることが出来ない。そう思いながら少年の寝顔を眺めていくうち、狼は自分の欲望を抑えきれなくなってしまった。

理性を失った狼は、本能のまま眠っている少年に手を伸ばしていき――》

物語は何とも中途半端で、いかにも危険な展開を匂わせながら止まっていた。

ページ数から考えて、おそらく次の更新で物語も終わるだろう。

加奈は本を閉じて、鏡に映っている自分の姿を見る。

だいぶ前から薄々と感じていたことだが、もう受け入れざるを得なかった。

自分はこの物語に書かれている『狼』なのだ。この狼のように相手に対して叶わない感情だと分かっているにしても、それを抑えることができない醜いオオカミなのだ。

そう思うと、なぜだか涙が抑えられなかった。

【07】オオカミ少女の暴走

翌日、目が覚めた加奈は、念のためベッドの上で自分の体を確認する。

どうやら、オオカミの耳と尻尾は引っ込んだようだ。

ようやく肩の荷が下りた加奈は服を着た後、顔を洗いに部屋を出る。

昨晩は体調が悪いとウソをついて、夕食は食べなかった。

食べ物には壮介が風呂に入っている隙に冷蔵庫からくすねて、何とか空腹はしのいだ。もちろん風呂も細心の注意を払って入った。

その後はあまりにも頭が興奮して寝付けなかったため、仕方なく母親からもらった睡眠薬を飲んで眠った。おかげで今はだいぶん気分も落ち着いた。

顔を洗う前に加奈は壮介の部屋に行き、トントンとノックをした。

ドアが開き、やや顔色の悪い兄が姿をあらわした。

「ああ、加奈か。具合の方はどうだ？」

「少し良くなった。……あの、昨日はごめんね。ちょっと乱暴しちゃって」

「いいんだ。気にするな。加奈が元気だったら、俺はそれでいい」

加奈はホッとしながらも、壮介の様子に首を傾けた。

「で、なんか眠たそうだけど、どうしたの？」

「はは……。実は明け方までゲームをやっててさ。おかげで寝不足だよ」

「大丈夫？ 無理しないで寝た方がいいんじゃない」

「へーきへーき。今日は家の家事もやらなくっちゃならないし、病み上がりの加奈に負担はかけさせたくない。今日は父さんも母さんもいないし、何か困っていることがあったら、どんどん俺に言っ

きていいぞ」

「困っていることねえ……」

今日は一日中、壮介と二人っきりである。

その事実を改めて確認した瞬間、加奈はまるで口が勝手に動いたかのようにポツリと言ってしまった。

「じゃあ、家事とは関係ないんだけど、また宿題を手伝ってくれないかな」

「宿題？ それって、この前やった数？ か？」

「うん。また昨日の授業で出ちゃって……」

加奈の頼み事に、壮介は即座にうなずいた。

「分かった。じゃあ、昼飯を食い終わったらやろうか」

「ホントごめんね。それじゃあ、私は朝食の支度をするから」

「ああ。俺も後で行く」

ドアが閉まった後、加奈は少し上機嫌になりながら階段を下っていく。

その途中で、昨日の浩史とのやりとりを思い出した。まだ、どちらにしようか決めかねていたが、今は壮介のために朝食を作ることが最優先である。

考えるのは後回しにして、ひとまず加奈は顔を洗いに行った。

約束通り、午後になって壮介と一緒に勉強することになった。

今日は両親も不在なので、加奈の部屋ではなく一階の居間で勉強をすることになった。

彼女の部屋とは違い、居間にあるクーラーは通常営業を行っていたからだ。

加奈は二人分の麦茶を台所から用意して、テーブルに座った。オオカミ化や浩史に関する問題はまだ解決していないのに、今はやっと気分が良かった。

教科書を開く。

「今日はこのページからなんだけど、兄さんできそう?」

「うーん。難しいけど、できなくはない箇所だな」

目をしょぼしょぼさせながら、壮介は教科書を眺めている。

二人とも午前中は家事で忙しかったため、寝不足の壮介はそろそろ限界に近いようだった。

見かねた加奈が、少し口調を強くして言った。

「兄さん。約束したんだから、ちゃんと起きててよ」

「ああ。寝るのはこれが終わってからにする」

眠気覚ましがてらに麦茶を半分飲んで、壮介は問題に取りかかる。相変わらず教える内容は的確で、特に手詰まりすることなく加奈も順調に問題を解いていった。

半分ほど進んだ時、壮介がイスから立ち上がった。

「ちよつとトイレ。長いやつだから、戻ってくるまでに一問くらい解いておけよ」

「もう……そんなことまで言わなくていいの」

ハハハと笑い声をあげながら、壮介は居間から出ていった。

ぽつんと一人になった瞬間、急に加奈は勉強する気が失せてしまった。

目の前に壮介がいた時は、あんなにやる気だったのに――。次の問題の解き方も、すでに壮介から教えてもらって解けるはずなのに、なぜかペンを動かす気になれなかった。

ひとまずペンをテーブルに置いて、加奈は休憩することにする。

ちびちびと麦茶を飲みながら、壮介が戻ってくるのを待っている時だった。

ふと、ある物が視界に入った。

それは棚の上に置いてある母親からもらった、睡眠薬の箱だった。加奈が使ったのは昨日が初めてで、中にはあと一粒だけ残っている。しかも母親はすでに新しい睡眠薬を買ってしまったので、実質上あれは加奈のものだった。

そしてテーブルの上には、壮介の飲みかけの麦茶がある。

この瞬間、加奈の中で得体の知れない『何か』が理性に総攻撃を始めた。

それに伴って、体の中が急に熱くなってくる。

ダメ、そんなことやってはいけない。そんなことをやってしまつたら……。

加奈は懸命に理性を維持しようと努めたが、開けてはいけない扉をつい開けたくなってしまうような抑えきれない欲求が、加奈の中でぐるぐると駆け巡っていく。

これらの一連の攻防は、ほんの十秒ほどの出来事だった。

——やがて、勝者は加奈に行動させる権利を与えた。

加奈はごくりと、唾を飲みこむ。震えている手をぎゅっと握りしめて、イスから立ち上がる。

いつ壮介がトイレから出るのか分からなかったので、行動は迅速にやらなければならない。

箱から睡眠薬の錠剤を取ると、シャーペンの背を使ってノートの上で細かくすり潰し、それを壮介の麦茶に入れた。粉末が溶けていく光景を眺めながら、加奈は自分の心がどす黒いものに犯されていくような気分になった。

机に残った粉末を処理した後、タイミング良く壮介が居間に戻ってきた。

「加奈。できたか？」

「ごめん。うつかり忘れちゃって。もう一回、教えてくれないかな」

その声は、自分でも恐ろしいくらい平坦で明瞭だった。

壮介がイスに座る前に、加奈は続けて言う。

「兄さん。麦茶もぬるくなっているし、そろそろ新しいのを入れたいわ。だから、そこに残っている麦茶を飲んじゃって。私はもう飲んじやつたから」

「おお。そうだな」

疑う余地すら見せず、壮介は睡眠薬入りの麦茶を一気に飲み干す。

コップを受け取った加奈は何喰わぬ顔で台所へ向かい、兄のコップだけを丹念に洗って新しい麦茶を入れた。おそらく壮介がこの麦茶を飲むことは、しばらくないだろう。

二つのコップを持って居間に戻ると、壮介は険しい顔つきでイスに座りながら頭を抱えていた。

「どうしたの。兄さん」

「……急に眠くなってきた。多分、そろそろ限界かもしれない」

「えーっ。まだ半分しか終わってないのに」

加奈が言い終わらないうちに、壮介は居間のソファーに倒れるように横になる。

やがて、もぞもぞとソファーの上で動いているうちに完全に眠ってしまった。

——加奈の体からオオカミの耳と尻尾が生えてきたのは、その後だった。

午後の二時で生えてくるのは、これまでで圧倒的に早かった。

しかし、なぜだか焦りの感情は生まれてこなかった。あるのは無防備に眠っている壮介に対する、これまでにない高揚感と、理性を踏み越えて本能で動くことができる『悦び』だった。

「ふふふっ……」

獲物を捕らえた獣のような目で、加奈はつい笑い声をあげてしまう。

服を脱いで、いつものスポーツブラと下着姿になると、加奈はまず居間のカーテンを閉めた。そして玄関に向かい、家のカギが掛かっていることを確認。

両親は明日までには帰ってこない。ついでに来客の予定もない。

念のためトイレや風呂場にも行って、窓も閉まっていることも確認した。

やることは全部やった。

今の加奈に、遮るものは何一つなかった。

居間に戻った加奈は、壮介が眠っているソファーの前でしゃがむ。

睡眠薬もバツチリ効いており、いくら物音を立てても顔をつねっても彼は全く起きる気配を見せなかった。極端なことをしなければ、まず起きることは無いだろう。

すでに理性の大部分が浸食されており、今の彼女は、自分が一体何をやっているのかですら半分自覚できないままだった。

「……はあっ」

加奈は無意識に、色気のある吐息をこぼす。

そして仰向けに眠っている壮介の上に体を重ねた。

尖った爪で傷つけないように、ゆっくりと壮介の頭部を包み込むように腕を回す。

彼の体は意外と固く引き締まっており、これが男性の体なのかと初めて実感する。その最中も眠っている壮介の吐息が、ダイレクトに加奈に届いてくる。麦茶の香りがした。

「……兄さん」

自分の全体重を壮介に預けながら、加奈は彼の口元でつぶやく。腰のところにある尻尾も、まるで遊んでいる犬のように激しく左右に振っている。

もう、我慢の限界だった。

あの物語の狼も、きつとこんな感じで少年に迫っていくのだろう。理屈では分かっているけど、異性の体には口では表現できない魅力と興奮がある。きつと、それは男性の方も女性に対して同じように思っているかもしれない。まさに今の加奈も、全身で壮介の体を感じながらその魅力に自分から溺れようとしていた。

「兄さん。私、兄さんのことが――」

そうささやきながら、加奈は唇を壮介に預けようとした瞬間だった。

ピンポーンと、家のインターホンが鳴った。

——この瞬間、加奈を支配していた黒い感情が一瞬にして崩壊し

た。

ようやく現実が目が覚めた加奈は、今の状況を把握する。

眠っている壮介の上に乗ったまま、加奈はしばらく言葉を発することができなかった。

「あつ、あつ……」

全身を震わせながら兄の上から離れると、再びインターホンが鳴る。

それから数分間、加奈は生きた心地がしなかった。

今、目の前にはソファで熟睡している壮介があり、自分はほとんど裸の状態でたたずんでいる。そばには、脱ぎ捨てられた彼女の服。万が一、インターホンを鳴らした人が家まで入ってきて、この現場を目撃したら——加奈はうまい言い訳が思いつかなかった。

クーラーの機械音が、部屋に虚しく響く。

——早く帰って、早く帰って！

何度も心の中で叫びながら息を殺しているうちに、インターホンは鳴らなくなり、外からも人の気配がなくなった。どうやら諦めたようだ。

緊張感が解けて、加奈は腰が抜けたようにその場にへなへなと崩れる。

そして、猛烈な後悔の念が津波のようにどっと押し寄せてきた。

未遂に終わったとはいえ、義理の兄を睡眠薬で眠らせて手を出そうとしたのだ。もし、あのインターホンが鳴らなかったら、自分は欲情した才オカミさながら彼に——。

ぼたぼたと、涙がフローリングの床を濡らした。

「ごめんなさい……」

下着姿のまま、加奈は兄の前で頭を下げた。壮介はすやすやと眠っている。

自分は今まで何をやっていたのだろうか。

確かに壮介に対する好意はあったとしても、ここ最近の自分は明らかに異常だった。

壮介の前で平気で服を脱いでしまったり、浩史から告白を受けた後も、そっちの返事をともに考えようとせず、ついに今のようなことを起こしてしまった。自制するチャンスは何度もあったはずなのに、こんなギリギリの所まで引き延ばしてしまったのだ。

第一、加奈が壮介に対する『そのような類』の願望は、最初の時点では無かったはずだ。

でも、今やろうとしていたことは明らかに壮介という異性を使つて、自分の中の欲望を吐き出そうとしていたとしか言い様がない。

彼は単に性欲を吐き出す対象でしかなかったのか？

最初の頃はこんなことを望んでいたのか？

「ごめんなさい、ごめんなさい……」

何度も謝罪の言葉を述べながら、加奈は大粒の涙を流し続ける。眠っている壮介に届くはずもないが、それでも謝らなければならなと思った。

気付いた時には、加奈の体からオオカミの耳と尻尾は跡形もなく無くなっていた。

【08】名前のない本の結末と後日談

名前のない物語の結末はこうだった。

《——少女と化した狼が、少年に体を重ねた途端。

その少年が目覚めて、反射的に彼女を突き飛ばした。

その反動で薬の効果が半分切れてしまい、耳と尻尾だけが少女の体から出てしまった。これに驚いた少年は、慌てて近くに置いてあった猟銃を構える。

狼は少年に対する愛は本物だと説得したが、そんな戯言に耳を貸すことなく、少年は発砲。

狼は重傷を負いながら辛くも逃げ切ったが、少年に殺されかけた事実は彼女に深い心の傷を負わせた。少年には二度と会えなかった。それから身も心もボロボロになった狼は、森の中で一匹、薬の副作用による痛みと銃の傷によって、地獄のような苦しみを味わいながら息絶えたのだった——》

その結末を読み終わった直後、加奈は深く息を吐いた。

多少の同情はするものの、全く救いのない結末だった。

もし、自分もこの狼と同じようなことを壮介にしていたら、きっと——地獄のような死に様は別として——この物語のように、悲惨な結末を迎えていたのかもしれない。

そう思うと、あのタイミングでインターホンを押してくれた人には感謝を述べたくなる。

単なる偶然とはいえ、あのタイミングでなければ、おそらく未遂

で終わることはなかっただろう。顔はおろか声すら確認していないので、誰なのか分からないのが悔やまれる。

しかし、加奈は意外な所でその正体を知ることになる。

翌日の日曜日、加奈は浩史からのメールの誘いで駅前の公園にやってくる。

「ごめんな。いきなり呼び出したりして」

「いいのよ、別に」

おとといの出来事もあってか、お互いに言葉がややぎこちない。

「本題の前に、まずは小高にいろいろと謝っておきたいことがある」
そう言うてから、浩史は深く頭を下げた。

「俺、あの時、月曜日に返事を聞くつて約束したけど、やっぱり我慢できなかった……。めちゃくちゃ気になって、夜もまともに眠れなかったんだ」

「ごめんね。あの時は私も焦っていたばかりに」

「そこまでは良いんだよ。でも……実は俺、昨日の午後にさ。我慢できなくて、つい小高の家まで行っちゃったんだ。その時は、誰もいなくて留守だったけど」

浩史の言葉に、加奈は思わず目を瞬かせる。

「昨日の、午後？」

「ああ。二時頃だったかな。インターホン鳴らしたんだけど返事がなくて、一階もカーテンも閉まっていたからな。そのまま帰って、さっきのメールをしたんだ」

あまりのことに、加奈は呆然と浩史を眺める。

午後二時。

まさにあの瞬間、家の中では下着姿の加奈が眠っている壮介に手を出そうとしていたのだ。

つまり、あの時にインターホンを押したのは浩史ということにな

る。幸い加奈たちが外出していると思い、勘違いして帰ってくれたようだ。

加奈の態度を違う意味で受け取ったのか、浩史は再び頭を下げた。「本当に気になって行っただけなんだ！ ごめん！」

「そ、そんなことで謝らなくていいわよ」

どういう運命のイタズラなのかは知らない。

でも、自分はどうかやら間接的に浩史のおかげで暴走せずに済んだようだ。

ある意味、しっかりカーテンを閉めておいて助かった。

口には出さなかったが、加奈は心の中で何度も何度も浩史に感謝を述べた。

「言いたいことは、それで全部かな」

浩史は照れくさそうにうなずく。

そんな彼に加奈は笑顔を向けた。

「じゃあ、そろそろおとといの返事を言ってもいいよね」

加奈の態度に、浩史は意外そうな顔を浮かべた。

「小高？　なんか今日のお前……やたら明るい顔してんな。この前まで、学校じゃあんまり元気が無さそうにしてたくせに」

「北嶋くんのおかげよ」

「えっ？」

夏の風が心地よく感じる最中、加奈は返事を送った。

それから一週間後の日曜日。

加奈は壮介と一緒に、駅前にあるケーキ屋へと向かっていた。

「別に先週のお詫びなんかしなくていいのに」

「いや、あれは明らかに途中で寝た俺が悪い。だから、これで許してくれ」

「じゃあ、それで先週の分はチャラにするってことでいいわね」

「おう。ありがとな」

疑う素振りすら見せず、壮介は満足そうにうなずく。

結局あの後、壮介が起きたのは夜の七時頃だった。

睡眠薬の効果は数時間で消えたはずだが、もともと寝不足だったせいもあり、だいたい長い昼寝になってしまったのだ。非常に幸運なことに、壮介は自分が勝手に眠ってしまったと勘違いしてくれただしい。

そのお詫びとして、今日は彼のおごりでケーキを買いに行くこととなったのだ。

本当の原因は加奈の方にあるのだが、あえて加奈は何も語らないことに決めた。

何も知らないことが、むしろ幸せになる時だってある。正直に打ち明けてしまったら、それでこそ壮介は困惑してしまうだろう。

壮介は相変わらず自分を『家族の一員』として接してくれているし、今後も変わることはないだろう。

だから加奈自身も、彼を『大切な家族』として接していこうと心に決めたのだ。

血は繋がっていないなくても、叶わぬ恋だと分かっているとしても、今の自分分は充分に幸せなのだ。そして、あの日の件に関しては一生、誰にも話さないと心に決めた。

その時、携帯のアラームが鳴り、加奈はそれを取り出す。

やって来たのは浩史からのメールだった。内容は他愛のないものだった。

「そつえば、新しい彼氏ができたんだって？」

返信を打っている最中、壮介が話しかけてくる。

「うん。一週間前にね」

「経過は順調？」

「うーん……。まだ一週間だから、放課後に喫茶店に行く程度の付き合いしかしてないね。でも、テストが明けて夏休みになったら、どこかに行こうって計画はしてる」

「受験生で大変かもしれないけど、最後の夏休み。しっかり楽しめよ」

「言われなくても、分かってるって」

笑みを浮かべて、加奈はメールの送信を完了させる。

携帯をポケットにしまったとき、加奈の視線がちょうど通りがかりの公園に置いてあるゴミ箱に留まった。家のゴミ箱に捨てるのも難だったので、加奈はあそこでアレを処分することに決めた。

「兄さん。ちょっと待ってて」

加奈は壮介を置いて、そのゴミ箱の前まで走る。

そして持っていたかばんを開き、名前のない『例の本』を取り出した。これまで散々加奈を苦しめてきた本は現在、色のついたビニール袋に包まれている。

それを加奈は、ビニールごとゴミ箱に思いっきり投げ捨てた。

あの日以来、加奈の身にオオカミの耳と尻尾が出てくる現象は起こらなくなった。

物語の狼が死んでしまったことに関係しているのかは、さすがに分からない。

でも、物語も例の現象も終わった以上、加奈にはもう必要のないものだった。

どうして自分は、壮介に対してあそこまで過剰な行動をしてしまったのだろう？

ちよくちよく、そんな疑問が頭に浮かぶ。

もちろん、それを本のせいにするにはただの言い訳であり、間違ったことをやろうとしてしまった事実に変わりはない。深く反省している。

しかし、加奈は血の繋がっていない壮介たちと一緒に、生活していくうえでの大切なことを、これをきっかけに改めて確認したのだ。彼は大切な一人の家族なのだ。

狼と人間は絶対に相容れないのだ。

「加奈ーっ。早く行くぞ」

「今行くー」

ゴミ箱を振り返ることなく、加奈は軽い足取りで兄のもとへ向かった。

加奈が公園のゴミ箱から去って、数十分後。

眼鏡をかけた一人の少女が、その公園の前を通過しようとしていた。

「んっ？」

ふと、少女の視線がゴミ箱に捨てられているものに留まった。

よく目を凝らしてみると、本らしきものがビニール袋に包まれて捨てられている。

ゴミ箱を漁る趣味などないが、不思議と少女はそれが気になった。ゴミ箱の前までやってきてビニール袋を開けると、シンプルなハードカバーの本が彼女の前に姿を現した。

「うわあ、きれい……」

ゴミ箱に捨てられているものにしては、やたら高そうな本だった。中身を開いて確認してみると、無地のページが最後まで続いていた。メモ帳にしては装飾が豪華な気もするが、すぐに彼女は気に入った。

良い掘り出し物を見つけた時の喜びを味わいながら、少女は本をかばんに入れる。

そして、軽い足取りで家へと戻っていった。

【08】名前のない本の結末と後日談（後書き）

短い物語でしたが、これにて完結です。最後まで読んでくれてありがとうございます。

作品にまつわる裏話につきましては、作者の『活動報告』のページに書きましたので、お時間があれば是非そちらもご覧になれば嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2140n/>

悩めるオオカミ少女の憂鬱

2011年7月31日03時15分発行